

本年度の静岡県婦人の海外研修団は、昭和六十二年九月二十日、十月五日の十六日間、西ドイツ・フランス・イギリスの視察・研修をしました。

ここに、団長、副団長をはじめ二十四人の団員の皆さんに、その印象をひと言づつ語っていただきました。

- ◆私は私と流されずに自己の生き方を貫く姿に感心した。これからの私の生き方として、心に自分のモノサシを持つことが必要である(団長)
- ◆ダンケシエンノ合理的な生き方を。メルシーノグッドセンスを。サンキナーノロイヤルな心を。そして、ありがとうノすばらしい日本(副団長)
- ◆西独の街並みはとにかく美しい。生活は質素でいて常に暖かみを忘れない。飽食時代にある私たちは今こそ考えねばならない(H・T)
- ◆心の豊かさや家族のつながりを大事にしながらも各々がお互いにその人格と立場を認め合って生活しているのが素敵だと思った(T・I)
- ◆豊かな食事、おいしい水、教育水準の高さ、一億総中流生活など日本の良さを再認識した。英会話習得は若者に必須と感じた(S・N)
- ◆「農業系の大学を出て銀行マンになる人はいない」夫婦で家事分

担や子育てをしている姿と共に最も印象に残った言葉です(E・S)

◆真の接待とは豪華な食卓で他人を迎える事ではなく、普段着の姿で接し、明るい心配りで今相手が何を求めているか察すること(A・T)



カソリックボランティア協会で

- ◆歴史的遺産の素晴らしい先進国で、物事を長期的に考え、良いものを大切に、質素で地についた心豊かな生活を学びました(S・S)
- ◆海外研修に行くに決めた時から常に啓発されています。この機会を得た事で私の生涯の指針を得ることができました(A・S)
- ◆人のことを考えられる人間、人間を人間として愛し、個々を尊重し自分も人々から尊重されることのできる人間になる事(K・M)
- ◆独立心、物を大切に、簡素な食事、街全体での環境美化、三ヶ国共通の印象でした。ゴミの少なさも食

生活の影響かと思えます(M・I)

◆介護者の生活も大事にするケアセンターの早期実現を。気分転換によって愛情ある介護を続けられる家庭が増えるように(H・O)

◆日本の様に構えず、そのままの家庭が見られたホームステイ。これなら私たちも受け入れられる。小さな国際交流の場として(T・S)

- ◆水は全て空からの贈り物。ヨーロッパの飲み水は買う物。日本の静岡の水は世界一美味しい物。帰国後、水の有難さを再認識した(F・S)
- ◆厳しい冬に備えて、厚い壁の家を造り、多くの食糧を貯え、窓辺で花を育てるドイツ人の生活は、ずっしりと重く、根を張っている(F・A)
- ◆公共施設の利用に駐車場の確保にまでサービスを求めるのは考え方によっては過剰だと思った。緑を大切にしているドイツから学ぶ(K・O)
- ◆景色の一番の違いは道路に邪魔な物がないことでそれは電柱でした。日本においても同じ景色がみられるといいのに!!(T・N)
- ◆物の豊かさに押しつぶされることなく心豊かな生活をしているように思う。何を必要としているか吟味する態度は見習いたい(A・M)

◆西独のマーケットは野菜、果物が山積。見た目よりその本質の良さを食しているのか小さなりんごには消毒の気配はなかった(N・K)

◆歴史と伝統を守る街造り、古い物を大切に作る心豊かな生活、ゆとりある生活態度と多様な表現力は、是非学びとりたいです(K・K)

◆人生にはいくつかの出会いがある。言葉が通じなくても、全体を上手に使うこと。それは聞く耳であり、しっかりと見る目と口(K・N)

- ◆責任のある自由、自然との共存、色々の人を受け入れる人間同士の共存、古きものと新しきものとの共存、老人の笑顔がステキ(S・I)
- ◆心の糧を与える教育と体験学習は人間形成に大切である。男女が互いに尊重しあつて社会参加する為には人格づくりだと思ふ(H・S)
- ◆物を大切に作る心、食べ物を大切に作る心、無駄をしないことによつて、もっと有意義なお金の使い方ができる(M・O)
- ◆高齢化・生涯学習・婦人問題等、今後の参考になる施設を訪問し、女性がかつと社会に進出しなければと思いました(K・O)
- ◆独英両国でホームステイを体験し、子供に対して、住まい等に関して、父親のかかわり方が大変大きいことに感動しました(M・K)

ステラさんの 浜松日記



日本は安全でとてもきれいな国です。私たちはお金を貯めるために日本に来たけれど、日本は物価が高くてなかなか貯まりません。

私は小さい頃から日本のことを知りたくて、よく雑誌や本を見て覚えました。それで日本に来ることになったとき、とても嬉しくて夢かと思いました。

日本に初めて来たとき、日本人は皆、着物を着てチョンマゲを結っているかと思っていたので、東京を見て驚きました。東京はブラジルのサンパウロみたいにビルが建ち並び、車がたくさん走っていたので、私の想像していた日本と変わっていて残念でした。でも二年目に京都へ行って、昔の日本を見ました。とても素晴しかった。私の夢がかないました。

浜松は少し田舎なので、ときどき何もすることが無く、行く所も無くてつまらなく思うことがあります。でも浜松の人はとても親切で、友達がたくさんできて、とても良かったです。

私の主人は本田のサッカーの選手で、午前中は事務所働いて、午後はサッカーの練習をしています。私は、本田で今はブラジル人に日本語を教えています。また、ブラジルへ行く研修生がいるとき



は、ポルトガル語も教えます。

私には子供が一人います。「マユミ(真由美)」という名前です。日本で生まれたので、日本名にしました。今一才八ヶ月です。もう、少し日本語とポルトガル語を話せます。

私たちは日本にもう六年もいるので、あまり困ることはありません。でも、まだ慣れないことがあります。それはブラジルと比べて、住む所が狭いことです。それと家族に一年に一度しか会えないことです。

でも今はとても幸せです。

サッカーの本場ブラジルでは、サッカーはひとつのスポーツではなく、生計を営むための仕事であり、先端技術を世界各国に輸出する日本企業と同様の国際ビジネスでもあります。

メシアスさん夫妻は、サッカーでは後進国である日本に、その「先端技術」を売り込むため、六年前来日しました。ステラさんにとつて、日本は興味こそあれ、全く未知の国で、夫の海外赴任に伴う日本の奥様方と全く同じ心境だったことと推察されます。

けれども、日本人街を作った中で生活をする日本人とは違って、ステラさんは積極的に日本社会に入っていきます。陽気なブラジル人気がそうさせるのでしよう。ご主人と同じ会社でポルトガル語を教える等、自分のもつ技術を彼女なりに発揮して頑張っています。最近では新しくチームに加わったブラジル選手のお世話で、かなり多忙な毎日を送っているとか。

「マユミ」というお子さまの名前をみても、お二人がどれほど日本に愛着をもっているかがよくわかります。マユミちゃんが国際人として、将来どのような活躍をするか、とても楽しみです。(M.T)

「女縁」が 世の中を変える

上野 千鶴子
編
電通ネットワーク研究会

日本経済新聞社

女縁……目慣れない言葉である。
「女縁とは、女が妻でもなく、母でもなく、個人として活動できる選択性の高い人間集団」と上野さんは定義した。

統計や図解を豊富に盛り込んだこの本は研究論文(理論書)を読む趣もあるが、とにかくおもしろい。ネットワークの重要性については今更言う必要もないだろう。人のつながり(人間関係)＝ネットワークはおおむね人的資産である。地縁・血縁・井戸端会議メンバーも強力なネットワークだ。だが、都市化・核家族化・個人化が進み、人と人とのつながりは薄れてきた。地縁はない、血縁は薄くなった、社縁も持たないという女性たちが始めた独自のネットワーク——それが選択縁(女縁)である。

ルポ風な文章から、アトリエFという平均年齢五十二歳の女性メンバーで作ったシンクタンク(これも女縁の一つ)がグループインタビューをして集めた、様々な女縁を形成する女性たちの素顔、生き生きとした活動の姿が見えてくる。

脱専業主婦(家事も仕事も行う兼業主婦ではない)・えんじよいすと(女縁活動を生き生きとエンジョイしている緑女イスト)の姿。「そのり合わない近くの人より気心のしれた同志」を大切にしている態度。家事専業のたこ壺からはい出して孤立を脱したいという願望。社会学者上野さんのするどい観察の眼が、女性のしたたかな横顔を捉える。

もちろん、時間あり、金ありのえんじよいすととの存在は、やっかみの対象となりえないわけじゃない。しかし、○○さんの奥さん、○○ちゃんのお母さんではなく、自分の名前で存在できる場、情報交換の場、助け合う共同体、活力を生み出す場としての女縁は魅力的だ。一つ一つのネットワークが重なり合う部分を持ちながらつながり、ネットワークの人の輪が広がっていくとすばらしい。

●●●新刊紹介●●●



「女と男の交差点」 毎日新聞大阪本社学芸部
この世の中に二つの性しかない男と女、そんな男女の分かり合えない特性がユーモアタッチでつづられている。「悪妻の条件」「ダメ亭主」など、各パートごとに読者も交えての本音の交差点である。読んで笑ってウップン晴らしをするか、歩み寄りのための書とするかは読者しだい。 パンリサーチ出版 九八〇円



「パパはステキな男のおばさん」 石井睦美著
会社に勤める母親に代わって、家事を担うマリの父親は、世間から見ればまだ奇異な存在。子供と一緒にこの童話を読んでみれば、私たちの心もまたマリの様にゆれ動くだろう。 草土文化 九五〇円



「女性たちのバーナウト―燃えつき症候群―」
ハーバート・J・フロウデンバーガー他
仕事、家庭―女性としてしなやかに生きようと努力する中で生じるさまざまな葛藤。米国の女性に流行したこの燃えつき症候群のメカニズムを心理学的に解明し、アドバイスしてくれる。 コンパニオン出版 一、三〇〇円



「女が自由を生きるとき」 青木やよひ著
感性からのフェミニズム
いま、世の中が大きく変わろうとしている。この時代のさまざまな問題を、女性はどうとらえ、どう生きたらよいか、テーマ別にやさしく解きあかす。『いま』を生きたあなたへの著者からの熱いメッセージ。 オリジン出版センター 一、七〇〇円



「素敵に生きる女の心づかい」 下重暁子著
生きる指針を与えてくれる、珠玉の一冊。個性を育て、自分らしい生き方をする戦いの中で自分を育てることの大切さを痛感する。苦しみ、悩む自分を勇気づける言葉の数々。座右の書とするのに値する本である。 海電社 一、一〇〇円

バナナのこと

私が小さかった頃、バナナは大変高価な食べ物であった。初めて口にしたのは、私をかわいがってくれた伯母が、町で一本買ってくれた時である。私が捨てた皮を拾ってにおいを嗅いでいる大人を見た時、子供心に、何か非常に珍しい物を買ってもらったのだ...と思っただけ記憶がある。

遠足にも運動会にもバナナを持ってくる者はめつたになく、それは果物屋の店の奥に、うやうやしく鎮座ましましての食べ物であった。それ故、私は今に大人になつたら自分の初月給でいやという程バナナを食べてみよう...と、心ひそかに決意していた。

が、意外にその時は早くやってきた。中学の修学旅行で、バナナの叩き売りに遭遇したのである。(実はこの頃、バナナの輸入自由

夕食はカレーライス? おでん?

仕事の関係とはいえ、夫と子供を家に残しての夜の外出はどうも気まずい。

夫に、「夕食は作っておいたから、温めて食べてね。」と言って出る朝。メニューはカレーライスかおでんになる。外食産業大はやりの昨今。しかも自炊経験三年、友人を食事に招待したほどの夫だ。食事が用意できないわけではない。

なぜ私は食事の支度をしていくのだろうか。①「主婦として、食事の支度をするのは当然よ。」疑問が心をよぎる。本音じゃない。

②「私なりに一生懸命やっているのよ。」私が仕事をすることを夫が心から賛成しているんじゃないことはわかっている。だから...

化が進み一部の都市では値くずれをおこし始めていたのである。私とA子は一山二百五十円(当時ラーメン一杯六十円位)で叩き落とすと、みやげ物を買う自由時間である事も忘れ急いで宿へ帰った。部屋の戸を閉めきると息もつかせずそれらをたいらげた。この事はたちまちクラス中の評判となり、皆がわれもわれもと京の町へバナナを買いに走つたのである。後後考えてみるに、あの旅行でどんなコースを廻り、何を見たのかさっぱり記憶がない。思い出すのは、あの甘い香と心ゆくまで食べたという満足感だけである。

その後、バナナは急速に値下りを始め、私のバナナに対する熱望も次第にさめていった。

ポプリ

(自己防衛かな)

③「仕事をしていてって家事の手抜きはしていないわ。」家族や同僚にデモンストレーション? 自分を良く見せたいだけなんですね。私の家事ぶりなんて、家事専門の人の足元にもおよばないくせに。

「夕食の支度はしなくていいよ。俺がやるから。」お母さん、夕食の支度は私たちがやるから心配しないでね。「今日は遅くなるから、夕食の方よろしくお願ひしますね。」さて、これから先、わが家に最初に登場する言葉はどれだろう。



今どきの子を見直した一日

「現代っ子」と言うことばが聞かれなくなつて久しいな...と思つていたら「お母さんそれを言うなら、今どきの子」と言うんだよ」と娘が教えてくれた。「今どきの子」か!確かに、私たちの子供時代とは随分様変わりしている。まず発想が違う、言葉使いが違う、大人に対してのはにかみなど、微塵も感じさせることなく威風堂々と見える。「でもね、普通の子」というのもいるんだよ。」と娘は付け足した。近頃の若者気質にも一言いいたげな年を迎え、小学生気質なんぞ理解できなくても当然!とばかりに過ごす日々であった。

そんなある日、子供たちの付き添いで老人ホームへ行く機会があった。自分たちで作つた劇を見せようというささやかな会だ。お年寄りが集まるまでの数分、整列するでもなし、緊張するでもなくてんでんばらばら。母親たちはどうなることかとハラハラしながらも一言いいたいのをグツとこらえる。いよいよ始まり。司会をする子、人形を使う子、学級新聞の取材をする子、間を持たせようと笑いを誘う子とそれぞれの持ち味を生かした役割分担で進めてゆく。お年寄りの肩を揉み、話し相手をする子供たち。

子供たちの無理をしないせいはいっぱいの自己表現がお年寄りたちと見事に融和したひとときであった。いつの時代も子供は素晴らし

あとがきにかえて

フリートリーキング

テーマ

10年後の「ねっとわあく」

山崎 一年間「ねっとわあく」の編集に参加してきたわけですが、

この女性のための情報誌が10年後どうなっているか、どうあつてほしいかを考えてみたいと思います。齋藤智どうい内容が扱われているかが一番興味深いですね。

齋藤典 これまでの「ねっとわあく」を見ますと、受け手としては働く婦人は一部で、家庭婦人へのメッセージが主でしたね。今後は、就労と家庭との両立について、あるいは働く人たちの情報源として役立つものになっているかもしれませんね。

高木 戦後、女性の地位は一応制度的には整ってきたけれど、今度はその中味の見なおしが必要なのではないでしょうか。

齋藤智 これまでの「ねっとわあく」は女性の意識を変えようとしてきました。これが、これからの10年でまだ変わっていない男性の意識を変え

てゆき、それが男女共同参加型社会の実現に役立てばいいですね。齋藤典情報誌としては、男女の混じった形で年代別、例えば中高年むき、高齢者むきといった形も考えられるのではないのでしょうか。婦人課の講演会にも男性の参加がみられるようです。



高林 今、二十歳前後の男性がずいぶん変わってきているという話

をよく耳にします。いわゆる「新人類」ですが。今は会社においても終身雇用制が崩れてきていて、それを崩しているのもこの新人類といわれる層ではないですか。仕事もするが、休みはしっかりとする。となれば、やがて家庭をもつと、その家庭のライフスタイルも今とは変わっていくと思われれます。

高木 そうですね。それにしても今はもう少しゆとりがほしいですね。たてまえでいろいろ言っても、自分の家庭のこととなると難しいところがありますね。男性が社会的責任からある程度解放されれば女性の立場の理解など、受け入れる土壌ができるのではないのでしょうか。

齋藤智 そうした中で、情報誌のニーズも多様化してくると考えられますね。今は女性といっても、兼業主婦もいれば、脱専業主婦や没専業主婦と分ける考え方もあります。女性のための情報誌の未来を考えると、ある程度の性格づけも必要でしょう。啓発誌としての性格も、どんな啓発をするかが問題になりますね。

高林 テーマを何にもつていくか、「家庭」、「自立」にしても内容はかなり変わっているんじゃないかしら。期待がもてますね。

山崎 10年後にどんな生活環境のもとで「ねっとわあく」が発行されるのか、大変期待は大きいのですが、やはり女性のためだけの啓発誌ではなく、男女共同参加型社会をつくるための啓発誌となつてほしいですね。多くの男性にも女性にも読まれるための方法なども考えていたと思います。

おしらせ

- 一、平成元年度静岡県婦人の海外研修団員を募集します。
 - 二、この情報誌の「女性編集員」(五名)を募集します。任期は元年度一年間で、年間十五回ぐらいの編集会議と取材が主な仕事です。
- 申込み等問い合わせは、左記婦人課まで。

女性のための情報誌 「ねっとわあく」 14号

平成元年3月

編集・発行 静岡県県民生活局 婦人課
〒420 静岡市追手町9番6号
☎0542) 21-2137

表紙デザイン

県浜松織維工業試験場 小杉思主世